

筆一  
連載 ⑬随 筆  
翻訳するということ事

加藤 類子

十一月も最後の日曜日、花谷清先生のお誘いで、京都市国際交流会館で開かれた講演会「日本美術表現にみる獣たち」を拝聴した。講師は日本文化研究センター教授・稲賀繁美氏であった。氏の御研究は、ジャポニズム、オリエンタリズムを通しての東西比較文化美術史だが、その広範な研究は評価が高く、『絵画の黄昏』（1997年）でサントリー学芸賞、『絵画の東方』（2000年）で和辻哲郎文化賞など賞を受けている。一方、ひじょうにご多忙な中の講演ということもあり、講演のテーマに変更があった。内容は翻訳を通しての他文化の受容と総括したらよいだろうか。アートの語源とその変遷、自我の概念の発生、世界的共通性、相違性、近代美術の動向等、論は展開し、収斂しそうで再び飛躍し、類例や引用も多彩で、従ってゆくのが、自分の知識の量も限界があるので、困難を感じたこともしばしばであった。しかし、自分の関係してきたこととの関連も多く、最後まで興味をもって拝聴できた。

従って、多くの場合、自分に引きつけての理解であったろうと思うが、納得の一端をお話ししたいと思う。

翻訳はご承知の通り、通訳、同時通訳を含む他言語と母国語の置換え、或はその反対などであるが、稲賀氏のお話しは、より複雑である。

長い海外展との付き合いを通して、私には二つの感想があった。一つは、文明相互は、時代の古い新しいに関らず、意外な程、遠く広く伝わり受容されるものであるとの想い。もう一つは、翻訳に際して、もどかしい程に、文明相互は融通がなく、理解出来ず、誤解し易いとの想いであった。一見、相矛盾する二つの感想に、微かにではあるが、稲賀氏の講演は一つのヒントを与えて下さった。相互の翻訳を盛んにすることは、結果的には相互の誤解、誤訳を少くするけれど、相手の誤解を利用して、例えば観光政策などで、誤った日本文化を広げてしまうことは、翻訳者の注意しなければならぬ責任の一端であろうと思う。



もっと広義の「翻訳」であった。例えば、私の関ってきた展覧会の目録についていえば、日本の従来の目録や教科書、絵本などは右開きであった。一方、欧米のそれらは左開き。最近の日本の書籍も左開きが増えてきたが、それは、日本文を横書きする文書が増えてきたことと無関係ではないだろう。展覧会目録も例外ではなく、左開きが主流である。ところが、少し旧来の文化様式が入って来ると、このやり方だと混乱する。「鉄斎」の展覧会の折、たちまち困難に直面した。鉄斎の絵は、絵と賛の組み合わせだった文人画スタイルのものである。絵のみの配列では、右開きでも左開きでも大した問題にはならないが、賛は必ず右から書かれている。賛に掲載すると左開きでは工合が悪い。苦肉の策として、賛だけを数ページに亘って集め、解説文を付けた。そして凡例に、この数ページのみは右開きであると但書を付けた。我ながら不様で哀しかった。稲賀氏は漫画や映像を例に出して、何気なく描かれた右の手であっても、左開きの書物や左送りの映像となると、反転する。即ち、右の手のつもりが左の手になってしまう。異なる文明の伝統にとっては、左の手の映像は許容出来ないこともある。より素朴な例であるが、左展開が常識の鎌倉時代の絵巻物を、かのアーネスト・フェノロサが右展開として見ていたので、物語を異なって理解していたと笑えない笑う話を披露されていた。

## 句集・著作紹介

藍俳句会「藍合同句集 第10巻」

「藍」俳句会は、昭和四十八年七月創刊、平成二十五年の今年四十周年を迎える。平成二十三年には、現花谷和子名譽主宰より、ご子息の現花谷清主宰が、主宰を継承された。

花谷清主宰は、序において

誌名の由来の禅語「潤水湛えて藍の如し」のとおり、「藍」に集う一人一人が、さらに研鑽し、生きる喜びのための俳句、自分らしい個性の光る俳句を詠みつけたいと存じます。と「藍」俳句会の原点とこれからの記している。句集は、同人、会員合わせて二二六名の自選十五句が、五十音順で構成されている。

花谷清主宰句から

霜柱砂つぶ容れず砂の中

親展の封書に小窓小鳥来る

花谷和子名譽主宰句より

合掌のための両手よ桃の花

真綿負う一人娘として老いて

表紙、花布、栞それぞれに趣の違った藍色を用いた美しい

装丁の句集となっている。

藍俳句会刊 非売品（山内英子）

〔雲の峰〕二〇一三年七月号抜粋転載